江戸城明渡

人物

將軍	德川慶喜	岩倉具視
老中	板倉伊賀守	薩州藩士後官軍參謀 西郷吉之助
同	酒井雅樂頭	長州藩士 廣澤兵助
若年寄	永井玄蕃頭	土州藩士 後藤象次郎
同	松平豐前守	薩州藩士 野津七左衞門
大目附	戸川伊豆守	琵琶法師 芝坊
小目附	設樂備中守	坂本龍馬妻 お龍
勘定奉行	小栗上野介	狂女 千草
御用人	岩佐攝津守	お年寄 長束
先鋒	佐久間近江守	同 花町
旗下	伊庭八郎	近江守娘 藤野
陸軍總裁	勝安房守	武兵衞女房 おりき
相模屋武兵衞		十三代將軍後室 天璋院

若　者　進　　吉

其外小姓、刀番小姓、御小姓頭、御側御用取次、御小納戸、講武所、新撰組の侍、目明、後藤の供、小栗の供、薩州兵士、德川兵士、魚河岸若者、旗下士、僧、局、御錠口番、天璋院供、駕かき、鳥羽の百姓、女子供。

時　代――慶應三年――四年

第一段（慶應三年十月）

其一　京二條城内御坐の間

下手寄に上段、金地の大床、大幅をかけ、續いて棚。横に御納戸搆、前下段二の間、金襖下手、白鷺の杉戸、上手淵明の杉戸。

板倉伊賀守、酒井雅樂頭、永井玄蕃頭、松平豐前守、戸川伊豆守、設樂備中守、社杯で二の間に坐つてゐる。警蹕の聲、一同平伏、小姓一人先に立ち、將軍德川慶喜、三十、繼社杯、御刀番小姓刀を持ち、御小姓頭、御側御用取次、御小納戸附き、下手より出る。慶喜上段へ上りて着坐、小姓刀を刀掛へかけて、御納戸搆へ入る、御小姓

頭等二の間老中の後へ坐る。御側杉戸を明けて出る。慶喜に對して一禮する。慶喜うなづく、御側少しく退き、上手に向ひて一禮する。勘定奉行小栗上野介、四十代、社衍で出る。

御側　上野介でござります。

慶喜　それへ！

（上野介少し進む、御側上手へ入る、小姓等皆立つて後の襖の音のする程手荒く開いて入る）

慶喜　俄の出京は何か大事が起つたかな。

上野　（悲憤の體で）恐れながら御當家危急存亡の場合と相成りましてござります、長州御征伐以來、一年半の入費かれこれ五百萬兩に及びまして、最早出る所がございません。先年の御上洛には富士見藏の古金銀を當てましたが、下の關の償金、生麥の償金と多額の出費ばかり續きまして、また大奥の御入費を省く事も出來ませねば、更に旗下の祿を減ずる譯にもまゐりません。唯賴りに致しましたのは佛蘭西から六百萬兩と軍艦借入の義でございましたが――殘念にも調ひませんでございました。

伊賀　何、調ひません？（皆顏を見合はす）

上野　彼國も隣國と事がございまして、ナポレオン皇帝にも其方に苦心を致され、此方まで助力が出來

んと申す事でございます。（皆失望の體）

慶喜　イヤそれも却つて幸であつたらう。

上野　（不審がほで）これは異な事を仰せられます。唯今申上げました通り、最早外に出費の途がございませんの。事が無くても維持の方に苦しみますのに、彼長州の始末でございます。御先代御薨去の件で解兵になりましたが、先方では矢張屯を致しまして、甚しきは更に小倉を攻落したといふ事ではございませんか。（ト伊賀守の方を見る）

伊賀　左樣。（ト苦々しい體）

上野　それを此儘お捨置き遊ばしましては、御威勢は全く地に落ちますぞ。（ト一同を見まはす）

豐前　上州の仰せられる通り、是非共唯今御英斷遊ばしませぬと、彼等はいよ〳〵増長致す事でございませう。

上野　それ故一二の大藩をお懲らしになりまして、其上で此方より封建の制をお改め遊ばしたら、御威勢も立ち、御忠誠も通り、お家は萬代不易でございませう。

雅樂　しかし佛蘭西の方が破談になりましてはなあ？（ト心細い體）

上野　それ故絶體絶命となりましたが、先づ御決心の程を伺ひまして、どうにか良策を立てませうと出京致しましてございます。上樣――上樣――上樣――

（慶喜苦慮の體で、答へず。御側杉戸を明けて出る）

御側　申上げます、土佐守代理、後藤象次郎、お目見得を願ひます。

上野　後藤象次郎？（不審の體）

慶喜　これへ。

御側　ハ。（入る）

伊豆　土佐には兎角薩州と往來致す者がござるとやら——

備中　殊に阪本龍馬と申す者は長州にも出入致す相でござります。

玄蕃　イヤ後藤は好く土州の意を受けまして、兼てより公武合體に盡力致して居るものでござります。

（御側案内して、後藤象次郎、二十九、社来で出て平伏する）

御側　土佐守下來、後藤象次郎でござります。

慶喜　それへ。

象次　ハツ。（少し進む、御側入る）

玄蕃　建白とは何事でござるな。

象次　恐れながら申上げます、今日は皇國の危急切迫の時節でござります、黑船の渡來以來、或は鎖國、或は開港、公武の間に兎角思召が違ひまして、それが爲に双方非業の最期を遂げた人々も出來まし

たばかりか、十津川、生野の騒動、次で長防の御征伐、嘆かはしい次第でございます。最早過ぎ去りました是非曲直を論じましても何の益もございません。畢竟御政令が二所より出るからでございませう。依つて此際大御英斷遊ばしまして、公明正大の道理に從ひ　王政復古の大業をお立て遊ばしては如何でございませう。

一同　（慶喜の外）ェ!!!（驚く）

象次　宇内の形勢は申上ぐるまでも無く、こまづ御熟知遊ばしたればこそ勅許より先に假條約に御調印なされたのでございませう、（ト一寸笑を含んで）既に鎖國攘夷は出來ず、外國に對して世界の一國となる以上は、先づ國體より確定致さねばなりますまい。然るに御政權が二所にございましては——

雅樂　イヤ御政權の義は東照公以來御當家へ御委任になつて居るので——

象次　それは鎖國の中の事で、最早外國に臨む以上は、彼方にても方向に迷ひまして、既に兵庫開港の義に付ても、直に勅許を願はうと致したではございませんか。（老中等顔を見合はす）御當家に於ても一々御奏問になりまして、殊に諸藩の意見までお尋ね遊ばす樣になりましたのは、こりや御尤の次第でございます。（微笑を洩らす）

伊賀　イヤそれは……

象次　吾皇室は萬世一系でございます、然るに中古より政權は武家に移りまして遂に今日の有樣となり

ましたが、これは本來の國體ではございますまい、イヤ地球上今斯樣な所はございません、また天地間あるべからざる理でございます。（强くいふ）

上野　それで？（トぐつと見つめる）

象次　恐入つたる義でございまするが、御當家の爲、朝廷の爲、皇國の爲、申難い所を申上ます。先づ大政を朝廷へ御返上遊ばしては如何でございませう。

一同　（慶喜の外）御返上!!!（ト仰天する）

象次　次に議政所を上下二つに分ちまして、公卿方より陪臣庶民に至るまで純良の者を選擧致し、共議の上外國とも新條約を結びまして、殊に海陸軍は朝廷守護の親兵と致し、古來の制度も當今の時勢に當らんものは悉く改革致しましたならば、始めて獨立國の基礎が立つ事と存じます。

上野　（不快な體で）イヤこれは容易ならぬ事を言上なさる。一體御當家へ大政を御委任になつたのは一通りの譯ではございませんぞ。室町以來亂れに亂れた世の中をお靜め遊ばした大功に依つて、征夷大將軍を御拜命遊ばしたので――

象次　それは承はるまでも無く、織田、豐臣、兩家の跡をお繼ぎ遊ばしたのであるから――

上野　いや只お繼ぎ遊ばしたのではござらん、千軍萬馬の中を經てお靜め遊ばした御苦勞ほどの位ぢや。殊に關が原の事など思ふたら、薩州でも長州でも今日に至つた御恩を感佩せねばならん筈、それに

此頃の有樣は何ぢや。

象次　イヤそれも畢竟皇國の大事が起つたからで、皇國の爲には主人も藩も忘れる者さへござります。

上野　イヤ三河武士は決して忘れん、此骨が微塵になるとも、御恩はどこまでも忘れは致さん。それに大政返上などゝは、寧ろ不禮でござらうぞ。

象次　決して不禮は申しません、皇國の危急は朝廷の危急で、また御當家の危急でござります。それに今日の有樣では外國につけこまれても何を以て防ぐ事が出來ますか。最早一身一家の事を顧る場合ではござりますまい。唯々天下萬民一心協力致しませんと、開闢以來、一度も外國の侵略を受けん日本の大恥辱となりませう。

上野　……イヤ上にも思召がござる。（ト厳しくいふ。）

象次　それでは御採用になりませんか（ト慶喜の方を見て失望の體）——手前も斯樣な大事のお使にまゐり、お聞入れが無いと云うておめ〳〵と歸られません。主人に對し一藩に對して申譯をせねばなりません。（屹と立つてつか〳〵と行きかける）

慶喜　（先から考へてゐて此時決心の思入で）アこれ〳〵土佐の意見、自分の意に合ふた所がある——

上野　エ？（ト顔を見る）

慶喜　いかにも大政返上しやう。

一同　エイ!!!（大に驚く）

象次　あの御返上遊ばしますか。（ト戻る）

慶喜　去年將軍職宣下の時既に辭退したが、次で越前の意見もあり、今土佐の意見を聞いて、いよ〳〵返上と決心した。

上野　（膝をすゝめて）これは何を仰せられます、それでは御先祖始め御代々へ濟みませぬぞ。

慶喜　（苦しげに）濟まぬのは飽くまでも存じて居るが、返上せんとまた朝廷へ濟まぬわい。

雅樂　いや一旦御委任になつて既に三百年の長のお勤でござります。御内訓も無いからは何の遠慮に及びませう。

慶喜　三百年は兎も角も、近頃の天下の亂れは畢竟薄德の致す所ぢや。まして外國に臨む以上はとても封建の制では續かぬぞ。

伊賀　封建の制をお改め遊ばすにしても、大政を御返上には及びますまい。

慶喜　先づ此方より返上せずに制度ばかり改められるか。

豐前　イヤ一旦御返上遊ばしたら、また改めて御委任になるでござりませう。

慶喜　イヤ左樣な事は賴みにせず、誠心誠意より返上するのぢや。

象次　恐入つてござります、それでこそ始あり終ありと申すもので、皇國の爲、イヤ御當家の爲大慶に

存じます。

上野　いや決して大慶とは申されません、一旦御返上遊ばすが最後、いかなる事になるかも知れません。これはどこまでもお止め申します。

慶喜　いや既に思案に思案を重ねた事ぢや。最早此決心は動かさぬぞ。

上野　いや今一度御思案遊ばしませ、御連枝御譜代まで往々君臣の大義を忘れて居る有様、それを正しもせず、臣僕の諸侯と肩をお並べ遊ばして、くやしいとは思召しませぬか。（涙聲でいふ）

慶喜　君の爲ぢや、何ともない。（勉めて自制する）

上野　此上野介は見て居られませぬ、上御一人ばかりか、今までの御威光まで落しますぞ。

慶喜　エイ、くどい、もう申すな。

上野　お聞入れあるまで申上げます、左樣な事を遊ばるいでも、外に良策はございます。

慶喜　國の爲にはこればかりぢや。（ト目を閉ぢる）

上野　お家の爲に、なりません。（トすり寄る）

慶喜　ならぬとは不禮であらうぞ。（目を開て睨みつける）

上野　遊ばすのが御不孝でございます。（尙寄る）

慶喜　……エイ立てッ。

上野　いゝや立ちません、まだ〳〵申上げる。

慶喜　エイ、立て、立て、立てッ。

上野　お手討になるとも立ちません。

慶喜　不禮者！（刀に手をかける）

伊賀　（止めて）先づお待ち遊ばしませ。

上野　いゝや御滅亡を見るよりはお手討になる方がましでござる。

伊豆　上州にもおだまりなされ。

慶喜　（刀を置て）目通りかなはん、急度蟄して居れ。

上野　ハッ……（ト殘念の思入で俯むく）

伊賀　それではいよ〳〵御決心で？（ト慶喜の顏を見上る）

慶喜　（懷より一書を出して）これを見い。（ト渡す）

伊賀　（開き見て）ォ、安房守から――（ト雅樂頭に傳へる）

慶喜　（象次郎に）土佐へ此由傳へてくれい。

象次　承知致しましてござります。

（慶喜立つ、上野介恨めしげに見上る、老中等不安、象次郎安堵の體で道具まける）

江戸城明渡

其二　堺町御門前

正面遠く門、其間から向に御所の書割。側に辻行燈。上手下手石垣。薄暮。風の音。

阪本龍馬の妻お龍、三十、質素な風で上手から走つて出る。新撰組の若侍三人追ひかけて出る、逃げまはる、下手より伊庭八郎、二十六、幅の狭い月代、羽織袴で出る。此體を見て中に入る、お龍其際に逃げ入る。若侍八郎にからうとして、

一　八郎　オ、伊庭さんぢやないか。

二　八郎　オ、新撰組の方々、どうしたんです。

三　八郎　あれは阪本龍馬の妻です。

一　八郎　あれが？

二　今阪本をやつて來たんで。

エ、龍馬を！（卜驚く）

彼奴は薩州と長州の間を周旋したり、土州の若い者を煽動して、いけない奴です。

殊に後藤がけふ二條のお城へ參つたが、それも彼奴の建策です。

八郎　イヤ、後藤はそれ程過激な男でも無し、阪本でもどう建策したかなあ？

三　イヤ、彼奴は危険です。此度まであの位仲の悪かつた薩と長と結びつけるなんて、けしからん奴だ。

一　先づ彼奴をやつてしまつて愉快だ。

二　妻は逃がしたが、もう免してやらう。

三　いや彼奴女でも油斷のならん奴だぞ。

八郎　まあよろしい、近藤さんへよろしく。

三人　御免。（入る）

八郎　（行きかけて）オ、向から來る提灯は？

（小栗上野介供に提灯持たせて下手から出る）

八郎　上州ではござりませんか。

上野　伊庭さんか。

八郎　如何でござりましたお城の模樣は？

上野　徳川家もこれまでぢや！

八郎　エ？

上野　政權を御返上遊ばすぞ。

八郎　……どうして？（ト驚く）

上野　今土佐から後藤が來て其建議をしたが、上樣にも兼て其お考があつたので、それをお聞入になつたのですか、なぜお止めなさらなかつたな。

八郎　止めたとも〳〵死を以て止め樣としたが、却つて御咎を蒙つて、手前はもう口が出せなくなつた。

上野　けしからん、手前は不服だ、イヤ手前ばかりではあるまい、旗下一同不服だ、何の譯で御返上遊ばすので、それこそ將軍家の滅亡だ。

八郎　見す〳〵御滅亡と知りながら、どうして歸られやう、それに當地の樣子はどうぢやな。

上野　當地にも長州の藩士が内々入込んで居りまして、殊に薩州の屋敷では何か企てゝ居る樣子、土州まで左樣な建議をするとは、彼方へ附いたと見えますな。

八郎　敵か、味方か、中に立つて無事を計る積りなのか。

上野　何無事なものですか。將軍家の滅亡を促がすとは、敵の先手の樣なものだ。

八郎　正理の裏には計略がある、計略の裏に裏がある。これも矢張阪本などの策かも知れんな。

上野　其龍馬は今新撰組の人達が斬つた相です。

八郎　エ、斬つた？　イヤこりや却つて火を吹起す事になりはしまいかな。

八郎　起つたら尙好いではありませんか。とても無事には濟みませんぞ。

上野　誠に無事には兎ても濟まん。上樣にはお叱りを受けたが貴君方に云つて置かう、此上の考はかうぢや。（卜耳打ちする）

八郎　成程――それが第一でせう、ぢやあなたは？

上野　表面は蟄居せねばならんが、志はどこまでも――先づ江戸へ取つて返へし、出兵の用意をしよう。此方の事は賴みましたぞ。

八郎　承知しました。

上野　所詮血に血を流したからは、天下に流さにやならぬのう。

八郎　此血も流す時が來ました。

上野　それで誠の御代になるのぢや。もう再會はせぬかも知れぬ。

（卜互に顏を見合せて愁の思入り、上野介上手へ、八郎下手へ入る）

（後藤象次郎、下來提灯を持つて先に立つて出る。新撰組二人出て刀を拔き提灯を切落す）

侍一　待てッ。

象次　何者ぢや。

（切つてかゝる、下來止める、切られる――立廻――西鄕吉之助、四十二、總髮、木綿の羽織袴で上手より出

る）

吉之　後藤さんぢやないか。

象次　オ西郷さん！

（侍、吉之助に切つてかゝる。吉之助其刀を叩き落す）

吉之　あぶない事ぢやつたのう。

象次郎上手へ急ぎ足で、吉之助下手へ悠々行く。――鐵棒の音で幕。（風の音でつなぐ）

其三　洛北岩倉村閑居

二重上手に小さい床、棚、二重正面手欄、後に山、前椽、下庭、草生茂つた體。下手に小門、月夜。岩倉具視、四十二、總髮、道服、柱にもたれて居る、芝坊、五十代、剃髮、琵琶を弾いて居る。

唄

花の都も秋は尙夕淋しき風情なり、名は流れたる清水や、落ち來る瀧の音羽山、秋の葉色の溝毎にちるやもみぢのちり〳〵と亂れ行く世の浪華江や、芦のさはりは繁くとも猶世の爲に身を盡し――

具視　アこれ、それは平野が作つた月照の歌ではないか。

芝坊　左樣でござります。此頃大分九州で行はれて居ります相で私も筑前の人から習ひました。

具視　イヤそれなら聞きたうない、浮世を離れた詫住居ぢや、平家の都落の方が所望ぢやな。

芝坊　それでは當世の事には丸でおかまひなされませんな。

具視　かまはんとも〳〵先年は公武合體に盡力して、和宮樣の御降嫁に附添ひ、關東まで下つたが、それが爲に佐幕黨と疑はれ、半年立つか立たぬに勅勘を蒙むり、命までおびやかされ、西加茂の寺へ逃込んでは、また玆へ移ると追立てられ廣い天地に身の置所も無かつたが、今から思ふとつまらん夢ぢやなう。

芝坊　でも夢にしては恐ろしい夢でござりましたなあ。あれから姉小路樣の闇擊、中山樣の旗擧、三條樣始め七卿の長州落、蛤御門のいくさ、一體これからどうなるのでござりませう。

具視　どうならうとも又夢ぢや、おそはれる丈無用の苦み、それよりはあの山を友にして、鶴の相手になつてゐる方が何よりの樂みぢやて。

芝坊　でも鶴の聲は致しませんな。

具視　ハヽそれは飼ふにも蓄へが無い、飼はいでも飛んで來るのが山家の一德かの。

芝坊　しかし玆は氣違ひもまゐります。

具視　氣違ひも來る、幽靈も來る、鬼が出るかも知れんな。

芝坊　鬼が出てはたまりません、こりやもつと小原の奥へでもお入りなされたらどうでござります。

（狂女千草、二十四五、髪亂し、御所風の着付引きづり、帶を垂れ、はだしで出る）

千草　（歌ふ樣に）

野越え山こえ里うちすぎて

來るは誰ゆゑそさまゆゑ

（つか〳〵と内へ入る）

芝坊　（立上つて）それ出ました！

千草　何が出ました？　幽靈でも大事無い、さあ見せて下され、羅城門を！　朱雀の大路を！　大内裏を！　大極殿はどこにござります——そこか——こゝか——（トあたり探しまはり）エゝ早う見せて下され！

芝坊　一體お前はどこの誰や。

千草　私かえ、私は、待宵の小侍從や。

芝坊　待宵の小侍從？　それは平家時代の女やないか。

千草　いや紫式部や。

芝坊　何を云ふのや。

千草　いや小野小町や、衣通姫や、木の花さくや姫や。

芝坊　段々古代に遡ぼるな。

千草　また昔ほどなつかしいものがあらうか。さあ、殿、元の神代にして下され。（具視に迫る）

具視　好し〳〵。（わざと輕く）

千草　日の本は神國やないかいな。

芝坊　それも末になつて此頃の亂れ、お前も犧牲になつた人の身寄りやな。

千草　私の男は十津川で討死にしました。さあ、殿、打つて下され、夷狄を伐つて下され。（トいよ〳〵迫る）

具視　好し〳〵。（冷に袖を拂ふ）

千草　屹度伐つて下され。（ト尙取りつく）

芝坊　（はなして）そんな事をいふて、世の中は何が何やら？　ほんに夢と思ふより仕樣が無いなあ。

千草　いや夢ばかりか現にも、それ、そこに見える、こちの男が！　（ト上手へ行つてはまた戻り）光君が！　業平が！　殿は黑主やな。（トまた具視に）

具視　いや、遍昭ぢや。（ト苦笑する）

芝坊　ハヽそんなら私は喜撰かな。

千草　（琵琶を取つて振りかざして）お前は喜撰と違ふ、そんな嘘をつく者は天誅ぢや。

芝坊　イヤこりや溜らん。（ト逃げ出す）

千草　エヽ逃げるとは弱い男！　待て！　返せ！　昔に返して！　神代にしていなう！

（芝坊急いで入る、千草追うて入る。時雨の音。具視先から歌を案じて此時短冊に認め）

具視　さまゞ〳〵の夢こそ見ゆれぬる間さへ
　　人にかはれる吾身なるらむ

（お龍出る、跡見返つて内へ入る）

具視　誰ぢや。

お龍　私でござります。

具視　オ、阪本さんの？

お龍　御用心遊ばしませ、龍馬は斬られました。

具視　何者に？

お龍　新撰組らしうございます。

具視　莫迦な奴ぢや、阪本さんは血を見ずにやらうとしてゐるのに！

お龍　でも龍馬は薩州と長州の間を周旋渡しましたのを兼々睨まれて居りまして、去年も寺田屋へ踏込みましたのを、私が先づ知らせまして、危ない所を遁れましたが、今度は丸で不意打でございます。

（廣澤兵助、三十二、中剃、羽織袴で急足で出る）

兵助　オ、お龍さん、阪本さんはやられた相ぢやな。

お龍　ハイ……私も斬られます所を遁れまして、龍馬の事も氣が氣ではございませんが、續いて皆さんの方へもまゐるかと思ひましたから、先づ西郷様へお知らせにまゐりましたら、此方へとの事でございました。

具視　それは好く知らしておくれた、流石に阪本さんの――イヤ御愁傷ぢやなう。

お龍　いえ、御國の事で斬られたのでございますから……涙一滴こぼす事も出來ません……龍馬も本望でございます……唯あれ程盡力致しましたのに、其成行も見ずに死にますのが……殘念でございます……それ丈が悲しうございます……（泣聲でいふ）

兵助　御尤もぢや。あなたは殊に親御も安政の大獄に牢死、家財は池田屋騒動の時に取上げられた相ぢやな？

お龍　ハイ、貯へもございませんのに、親類とて世話をしてくれる者も無く、妹は既の事大阪へ賣られ

ましたのを、私着物を賣つて旅費にしてまゐりまして、妹を返さずば刺殺すと懐劍を拔かんばかりに談じて連れて歸つた次第。それから同胞を勝樣におあづけ申し、私は寺田屋の厄介になつて居りましたら、あの騒動が緣となり、西鄕樣のお媒で龍馬の妻になりましたが……二年にもならぬ中此始末……矢張はかない緣でございました……。

兵助　しかしまた阪本さんのお媒で、薩長の緣が結ばれたのぢや。土佐もと思ふのに容堂公は固より、後藤からしてまだ幕府と手を切る氣にならんが、向からこんな事をするからは、これで一轉するかも知れん。阪本さんの盡力は決してはかなくはなりませんから、あなたが代りに見るがよろしい。

お龍　私が見ましても……取次ぐ事も出來ません……（ト顔を背ける）

兵助　（具視に）これは早くやらんといけませんぞ。

具視　もうお疑はありませんかな。

（月少し光る、吉之助出る。）

兵助　（立つて見て）オゝあなたか。

吉之　お待たせしましたかな。

具視　さあ、此方へ――（お龍に）あなたは彼方でゆつくり休むが好い。

お龍　ハイ、それでは御免遊ばせ。（入る）

吉之　御存じかな、けふ後藤が二條の城へ行つたのを。

兵助　何の爲に？

吉之　政權返上を建白に。

具視　（眉をひそめて）先がけよつたな。

兵助　しかしよも聞入れはしますまい。

具視　いゝや、何とも云へん、向にしては上策ぢや。

兵助　もし取上げたらどうなさる。

具視　されば――（ト考へて）將軍職を止めた所で、まだ内大臣、其格で新政にあづかつては、矢張實權は向にあるから、眞の大改革は出來ん――こりや官位も、領地も返上かな。

兵助　それでは土佐からして不服でせうぞ。

具視　不服な者があつたら、これぢや。（懷劍を出す）

兵助　（屹と見て）それほどまで御決心で？

吉之　御同意ぢや、今の場合、是非一度死地に入らんと、本當に活返る事は出來ませんな。

具視　しかし私の戰になつてはならん、宣旨を戴く事にしようかな。

兵助　それは是非願ひたい。手前の藩も君側の奸を除かうとして、却つて朝敵の汚名を受けましたが、

三家老の首を切り、主人親子は蟄居してお詫びをしたのに、再度の御征伐とは、畢竟德川家の私とより思はれんから、どこまでも抵抗したが、それで以つて天下も動搖して、遂に今日の有樣となつたからは、今度こそ宣旨を頂戴して、正々堂々とやらねばなりません。

具視　また幕府の失態は此儘で濟まされません。抑々五百年來政權を武門に掌握するといふのが、第一に濟まん次第ぢや。殊に家康は秀吉の跡を奪取つて三百年、嘉永以來は上に對しては勅命に背き、下に對しては忠臣義士を殺して、皇國を危急に陷れた大罪、此儘にして置いては大義も立たず、承久建武の御無念も晴れる時がありません。

吉之　誠に此儘で王政復古などゝ兎ても出來ん事で、五百年の不義、三百年の積弊が六十餘州に染込んで居るから、天下の耳目を一新する大英斷をやらねばなりません。

具視　思ひ當るのは關ヶ原の時、家康の遺口ぢや、是非一戰と石田を挑んだが、それを學ぶともなく今はこちから！

兵助　吾藩もあの時の恨は骨に徹したが、やう〳〵時節が廻つて來ました。

吉之　いやもう藩長の、德川のと云はんがよい、日本の一大事ぢや。天を相手に大合戰をするのでごわすぞ。

（二人うなづく。時雨の音。日あかし職人風で下手へ出て、そつと行きかける、お龍裏から出てつかまへる。

爭ふ、兵助飛下りて切る。目あかし陰へ仆れ入る）

お龍　目あかしか、新撰組でございます。

兵助　お勝手へ忍んだのだから盗賊として澤山ぢや。

具視　（立上って）猶豫は出來ん、これから中御門へ行つて、奏請の事を頼みませう。酒を持てく（奥へ入る）

お龍　お取次致しませう。（入る）

千草の唄きこえる。

江戸が見たくば此節ござれ
やがてむさしの原となる。

（吉之助、兵助立つてあたり見まはす。月段々冴える、お龍酒盃を持つて出る、具視衣服を改めて出る）

具視　（盃を吉之助にさして）さあ一つお受け下さい。

吉之　（受けて）これは何の盃ぢやな。

兵助　誓の盃か、名殘の盃か。

具視　天地に愧ぢん心で天地に愧ぢん事をするのぢや、敗れて死んでも滿足ぢやのう。

吉之　また琵琶にでも歌はれて、人の心を動かしたら、跡を次ぐ者が出ませう。（お龍酌する、飲んで具視に

さす）

兵助　お龍さん、一つ歌うて下さい。（具視兵助にさす）

お龍　どうして私に歌へませう。

具視　西郷さん（琵琶を吉之助に押しやり）猶東雲の明烏ぢや。（普通に云ふ）

吉之　（琵琶を抱いて）泣くより外に――（歌ふ樣に、しかも調子はづれに云て）やる事がごあすなあ。

（皆顏を見合はして微笑する。月其上に光る――）

唄

菊はさく〳〵葵は枯れる

西で轡の音がする。

（千草薄を刀の樣に振りあたり切拂ひながら舞の手振で出て上手へ行く――幕）

第二段　慶應四年正月

鳥羽街道　其一

上手に藁家二三軒、下手へかけて斜に奥深く藪、其向田、丘の書割。圓錐形の帽、洋服の薩州の兵士番をして居る、老若男女逃げて來て入る。遠くから喇叭の音、段々近づき、徳川の兵圓い帽洋服で下手から出て來る。

薩兵　待て。

（佐久間近江守、陣笠羽織野袴で下手より出る）

近江　徳川内府の先手のものでござる、お通し下さい。

（野津七左衞門、洋服に日本刀を肩から掛け、上手より出る）

七左　なりません。

近江　何故なりませんな。

七左　第一何の爲に上京なさる。

近江　朝命であるから上京するので。

七左　それならば尋常の供まはりである筈ぢや、軍裝の兵卒を大勢つれるとは何事ぢや。

近江　それは警護の爲です。

七左　何の爲に警護なさるな。

近江　奸物があるから——

七左　だまれ、此度は公議に依つて取極めをなさるのぢや。

近　江　いゝや公議に依つて居らん、去年大政返上になつたにもかゝはらず、何等の御協議も無く未曾有の大變革を仰せ出されて、攝關、幕府を廢止になり、官位、領地まで返上せいとは、畢竟奸物のはからひぢや。加賀、仙臺からも其意を得んといふ建白が出たではないか、土州でさへ急激ぢやと申出られたと聞いて居る。

七　左　いや假令二三の異議があつても、それが爲に大綱に御變更はない、また大政返上した以上はかれこれ申して出る譯は無いのぢや。殊に領地返上に付てはお請書を出されたではないか。

近　江　……ィヤ茲で問答をしても無益ぢや、參内して申上げる。

七　左　參内するならどこまでも尋常の供まはりぢや、殊に會津、桑名は歸國を命ぜられて居るではないか、それを先手とは何事ぢや。

近　江　さう云ふ其元等も薩州の藩士ぢやないか。

七　左　いや勅命に依て固めて居る。

近　江　勅命か勅命で無いか、是非共參内して伺ふ。

七　左　強いて通らうとすりや免さんぞ。

近　江　何？

七　左　（後に向）打てッ！

（兵卒發砲する）

近江　（も後に向て）進め！

（兵卒進擊する、鐵砲の音。――暗轉）

其二

正面遠山、近く丘陵起伏、前田、所々藪の書割。立木少々。鐵砲の音。幕軍、中に甲冑きた者、陣羽織、義經袴はいた者など交つて退却して上手から出る。薩軍追うて出る。

伊庭八郎、網襦絆の上へ稽古着、短袴、後鉢巻で、下手から走つて出る。立廻り。二三人切つて上手へ入る――幕兵三々五々逃げて來る――近江守刀を振りながら後すさりに上手から出る。

近江　エイ進め〳〵、引くといふ事があるか、卑怯な事をするな、旗下の恥辱になるぞ、三河武士の恥辱だ。

兵士逃げ入る、薩兵出る、近江守自から戰ふ、銃丸當る、倒れる、薩兵入る。八郎走つて出る、近江守を見て起す。

近江　（心つき）オ、八郎、殘念だ……

八郎　しつかりなさい。大丈夫です。

近　江　いや駄目だ、私より味方が駄目だ、こんな田の中の街道をやつて來たのが、抑々失策だ、これぢや、兩方の岡から打たれるばかり、此方は號令が全隊に行渡らんから、勇氣はあつてもまち〳〵になつてなあ――。

八　郎　甘く向の壺へはまつたのです、鳥羽で喰止めて、破裂してから錦の御旗を立てるとはなあ！

近　江　ィヤ去年來のやり口はこれでもか〳〵といふ樣な煽動ばかり、浪人をつかつて江戸市中を亂暴浪藉。

八　郎　今こそ彼等を一擊と思ひましたのに、紀州も、彦根も應じもせず、淀も山崎もどうでせうなあ。

近　江　さう頼みにしたものまで裏切つては、いよ〳〵駄目だ、殘念だなあ。

八　郎　いやまだ大阪で喰留められます。海軍もまはつて居ります、歩兵も東海道を紀州あたりまで來て居ります。

近　江　しかし朝敵になつてはのう？　ァ、いよ〳〵御運の末だなあ。

八　郎　いやまだ〳〵江戸にはお城がござります。江戸城が微塵になるまでやるのです。サァお手を取りませう。（ト起しかける）

近　江　いゝや私は兎ても助からん――貴公しつかりやつて下さい――此刀は先祖が東照公より拜領したもので、佐久間家の重寶なり、私の魂ぢや。私が死んでは……娘一人殘るが……兼ての約束通り跡

を繼いで下さい。これは形見ぢや、イヤ聟引出ぢや。（刀を渡す、八郎無言に受取る）娘には（懐を探して）あゝ何にもやるものは無い。（鐵扇を開いて血に染んだ手の形を押し）これをやつて下さい。これは親の手だ、親の血汐だ、親は此通り血になつた。女でこそあれ此血を受次いで上樣の御恩に報いるのだと云つて下さい……

八郎　確にお渡しゝます……しかし手前も命があるか無いか分りません、若しそれまでに討死をしましたら、お跡を繼ぐ事も出來ませんが、將軍家さへ存亡の場合ですから御勘辨下さい。其代り此刀でこれから手前が切つて切つて切りまはしますから、それで少しは御滿足下さい。

近江　オ、好く云つて下すつた、それで安心して死にます、イヤ安心は出來ん、將軍家の事が氣にかゝる、江戸はどつちの方だ——

（よろめきながら立つて江戸の方を見やうとする、鐵砲の音、二人倒れる）

八郎　（立上り）オ、腹卷で留まつた——佐久間樣——

（起す、絶息の體、薩兵一人駈けて出てかゝる、八郎切る、涙を拂うて死體に向ひ片手で拜む——攻太鼓の音で幕）

第三段（慶應四年三月）

其一　日本橋魚河岸

上手寄りに二重、正面壁、出入口、上手土間、下手横へ通、外の店の書割。
女房おりき、三十代、若い者大勢ワイ〳〵云つて居る。

一　とう〳〵池上までやつて來やした。
二　そればかりぢやねぇ中仙道は板橋から新宿まで來て居やす。
三　北からは千住まで來て、此方の相圖を待つて居るんで。
四　あしたあたりは三方から攻めて這入るに違いねぇなあ。
五　江戸の土を踏ましちや、己等まで面が汚れらあ。
六　それにお城に手をつけさせちや、死んでも泥は落ちねぇぜ。
七　旗下ばかりかわつち等でも公方樣のお蔭がありやこそ、大きな顔がして居られたんだ。
八　水道の水が血になつても一人だつて入れるものか。
りき　さうだ〳〵女でも子供でも、ぢつとして居る時ぢやない、砂利でも何でも手當り次第投げつけてやらなくつちや、江戸ッ子の顔が立たないやね。

（若い者進吉走つて出る）

進吉　大變だ〳〵。

りき　何が大變だよ。

進吉　來やあがつた〳〵。

りき　來たつて誰がい？

進吉　薩摩ッぽが高輪まで！

りき　もう來たの？

一　どうしておめ〳〵入れたんだい？

進吉　なんだつて、かんだつて、丸つ切手向ひしないんですもの。

りき　エィ意苦地が無いぢやないか、女でも引きはしないのに、二本さして居てどうしたんだねえ。

進吉　そりや骨のあるお侍もあるんですがね、重な人達が弱いんですもの。

りき　そんな人はうつちやッといて、出かけたら好いぢやないか。

進吉　出やうとしても出さないんです、それは勝といふ奴がいけないんで、何でも薩州や長州の奴等と腹を合はして居るといふ事で。

りき　憎くらしいぢやないか、ぶんなぐつてやりたいね。

皆　イヤ叩き殺せ〳〵。

りき　さうお侍が出なけりや私等から出やうぢやないか。

進吉　さうです〳〵誰か先へ飛び出しや、士でも町人でも、どし〳〵續くに違えごぜえやせん。

一　江戸ッ子の腕だめしだ。

一同　やッつけろ〳〵。

（行きかける、一相模屋武兵衞、五十代、羽織著流し、奥より出る）

武兵　待て〳〵〳〵そゝッかしい事をするな。

りき　だつてそこまでやつて來たんですもの。

武兵　どこまで來やうがお城は確だ。出て好けりやお城からお出かけなさる。

りき　それが出ないんですもの。

武兵　いよ〳〵出さあ己等が出る、お侍は御恩を忘れても、己等はどこまでも忘れやしねえ、がまあ己が出ろといふまでは落ちついて控へて居ろ。

りき　これが控へて居られますか。

武兵　エイ手前まで出しやばるない。

進吉　ぢや旦那は？

武兵　己はこれから勝様のお邸へ行つて伺つて來るから、

進吉　勝？　あんな奴の所へ行つたつて何になるものですか。

武兵　エイ、まあおとなしく待つて居ろ。

一　ぢやしつかり聞いて來ておくんなさい。

武兵　よし〳〵（若い者、進吉下手へ入る）

りき　（匕首を出し）これを持つていらつしやい。

武兵　フム（うなづいて懐へ入れ）ぢや行つてくるよ。

（行きかける、近江守娘藤野、十八、高島田、振袖で、急いで下手より出る）

武兵　オ、佐久間様のお嬢さん！

藤野　大變な事が出來ましたので——

武兵　大變な事？　ぢやまあ内へいらつしやいまし。（内へ戻る）

りき　オヤまあお嬢さん、どうなすつたのでございます。

藤野　……父は……いよ〳〵討死でございます。

二人　エイ！（驚く）

藤野　多分さうであらうと思つて居りましたが、死骸も見えませんので、またどつかへ落延びてゐらつ

しやるのかと心配をして居りましたら、伊庭さんがお隠しなすつたんだと或人から聞きました。

武兵　ぢや矢つ張……

りき　何とも申し様がございませんねえ。

藤野　御存じの通り、宅では私一人で、頼もしい下來もありませんから、御相談にまゐつたんですが――私はこれから上方へまゐらうと思ひます。

りき　エ？

藤野　死骸が隠してある所を探しまして、改葬をしようと思ひます。

りき　御尤でございます、ですが此物騒な東海道を女の身で行かれますものか。

藤野　いゝえ、それはどうなりとして参りますが。第一どの邊かといふ事を聞いてまゐらんと何にもなりませんから、是非伊庭様にお目にかゝりたいんですが――どこにゐらつしやるか分りますまいか。

武兵　何でも沼津か箱根邊においでの様でしたが、もう官軍がそこまでやつて來る様ぢや、お歸りになつて居るに違ひございませんぞ。

りき　それぢや直にもお邸へいらッしやらなけりやならないんですがねえ。

（伊庭八郎、羽織袴で出る）

八郎　頼む。

りき　ハイ、オヤ、今お噂をして居る所で、さあどうぞ此方へ。

八郎　御免（通る）

武兵　これは丁度――

藤野　好くまあ――（嬉しい思入）

八郎　今お邸へ行つたら此方へといふ事だからやつて來ました、早速ながら――（鐵扇を出す）

藤野　（受取つて）これは何でございます。（開く）まあ此血は！

八郎　それがお父様の……お形見です。

（藤野扇を顔へ當て、泣く、三人目を掩ふ）

八郎　いくさの樣子はお聞きでせう、敗れる味方を勵まして、お父樣には勇ましく鳥羽街道を小枝橋邊までは御無事でしたが、横から打出す鐵砲に、「殘念だ」とおつしやつてね……あなたには此鐵扇、「親は此通り血になつた、此血を受次で、上樣の御恩に酬いるよう」と御遺言でございました……また手前には此刀をお讓りになつて、佐久間家の事をお賴みであつたが、まだ〳〵將軍家の爲に盡さなけりやならんから、それが濟んで命があつたら、ゆる〳〵お話しませう、御免（立ちかける）

藤野　アもし、父の死骸はどの邊にございます。

八郎　それは高瀬川の側だが……お聞きなすつても仕方がありますまい。

藤野　いえ、私はこれから參らうと存じます。

八郎　エ？　イヤそれは御無用になさい、御最期にも將軍家の事が氣にかゝる、江戸はどちらと立上らうとなされた位……今にも敵軍が此江戸へ攻め入つたら、あなたも何なと手一杯上樣の爲になすつたら、それが何よりの孝行です、手前も佐久間家を繼ぐにしても、矢つ張上樣に勤めるのが今の道だから、今直にお約束通りしませんが、決して忘れはしませんからね……（ト情を籠ていふ）

藤野　ハイ……（呑込んで、顏を見、尙悲しく戀しいのを憚る思入）

武兵　イヤこれは御尤だ、これから上方へ御いでになるよりは、けふ翌にいくさになる江戸でございますから、其成行に依つて、なあ、おりき——

りき　さうでございますよ、若し無事に濟みましたら、伊庭樣と御祝言遊ばして御一所においでなさいまし。

八郎　いやそんな事は……まあ有りますまい、また別に盃をせんでも、此刀を受けた以上は、佐久間家の相續したも同樣だ、あなたも……さう思つて……決して見捨てるのではありません。（親しみと哀の思入）

藤野　ハイ……それでは私も……其積りで居りますから、あなたも……どんな事がございましても、

急度知らして下さいまし。（涙聲でいふ）

八郎　イヤ翌にも討死すると思つて下さい、其方が確だ。（藤野涙もち切れず俯く）

りき　あなた、そんな事をおつしやるものぢやございませんよ。

八郎　ぢやこれで――お別れします。（立上る）

藤野　アまだ色々申上げたい事がございます……（名殘惜しい思入）

八郎　（心引かれながら）聞いた所でどうする事も出來ぬ今の場合……御主人、賴みましたぞ。

武兵　イヤ私も翌が知れません。

りき　ぢや、あなたも？

武兵　江戸の花を咲かせませうよ。

（四人顔を見合はして嘆く、進吉始め若い者大勢出る）

進吉　旦那々々もう辛抱が出來ません、江戸を踏みにじるの、公方樣を切るのと、高言ばかり吐きやがる相で。

八郎　何、上樣を？（嚇となつて）御免。

（走つて入る、藤野密に泣く）

進吉　どうかわつち等もやらしとくんなさい。

りき　本當にもうたまらないね。

武兵　よし、ぢや己も出る。

進吉　旦那もお出かけですか、それぢや河岸中總出だ。

武兵　皆行け〳〵

（進吉等先づ行きかける――勝安房守、四十六、總髮、細い髭、質素な紋付羽織袴、四つ手籠に乘つて出る）

進吉　やあなたは〳〵（ト止る）

安房　（籠を出て）私は勝ぢや。

進吉　エ？（ト聞損つた體）

安房　安房守ぢや

若者　エイ……（ト驚く）

安房　相模屋の主人は内かな。

進吉　へイ内でございますが、どうしてまあ――（ト不審の體）

安房　一寸逢ひにまるつたのぢや。

進吉　（此方へ來りて）大變だ〳〵

りき　またかい。

進吉　勝がやつて來やした。

武兵　何だ、勝樣？（ト不審のかほ）

進吉　安房守でございますよ。

りき　安房守樣が御自身に？（驚いて見る）

武兵　これ早く（出迎へて）さあ、どうぞお通り下さいまし。

安房　免せ。（通る、駕かき入る）

武兵　こりや恐れ入りました、御用ならお召し下さいましたら、早速お邸へ上りますのに御自身にお入りとは何とも申樣がございません。（店先まで寄てゐる若い者等に）これきよろ〳〵と何をして居る、皆あつちへ行け〳〵

進吉　へィ〳〵御免下さいまし。（皆反感を現はしながら入る）

武兵　（りきに）早くお茶を持つて來ねえか。

りき　唯今（不安の體で藤野と入る）

武兵　殿樣、一體まあ何の御用でございますね。

安房　お前の顏を見込んで、賴みたい事があるが、どうぢや聞いてくれんか。

武兵　私にお賴みが？

安房　さうぢや、お前は金錢でも權威でも力でも負ける樣な男でない、また此魚河岸は江戸の中の江戸ともいふべき所、一市中の手本と思ふから此安房守が自身にわざ〳〵やつて來たのぢや。

武兵　へイ私共でも上樣のお役に立ちますなら、どんな事でも致しませう。

安房　フム、それでは云ふが、どうぢや憶病者になつてくれんか。（ト微笑を含む）

武兵　エ？（ト不審がほ）

安房　私は憶病者ぢや、上を賣り、德川家を賣り、江戸を賣る奸物と、旗下はいふに及ばず、世間にまで思はれて居る、其安房の意を受けて、憶病者になつてほしいな。

武兵　へイ？（ト愈々不審の體）

安房　今官軍は三方よりつめかけたて、それに少しの手出しもせず、此江戸城を明渡すのぢや。（重くいふ）

武兵　あのお城を！（ト驚く）

安房　どうぢや、憶病者であらうがな。（輕く笑を洩らす）

武兵　フム——（腕を組んで安房の顏を疑の目で見つめる）

安房　お前も御恩は存じて居らう、定めて腕が動くであらうが、私は殊に大役なり、いくさ位は心得て居る、其腕を撫で頭を下げ、此江戸城を明渡すのは、第一大君のおん爲ぢや、二には日本の御國に

は替へられぬ、不忠不孝の名は元より、徳川家までさし出すのは、また徳川家のお爲ぢや。

武兵　ヘイ、徳川家のお爲と仰いますか。（理解せぬ體）

安房　されば、お前も知る通り、鳥羽伏見の行きちがひから、既に朝敵の汚名を受けたに、また茲で手向ひしては、いよ〳〵汚名は誠となる、上樣は固より、お家まで滅亡ぢや、イヤ只むざ〳〵とは滅亡せん、茲で戰ひ、かしこで戰ひ、六十餘州は四分五裂ぢや、そればかりでない、薩州はイギリスに近づいて居る、フランスはまた味方に近い、オロシヤまで軍用金を貸さうといふ、內地の亂れは外國の爭と一になつたら、御國まで危うくなる。それを此儘治めるには、涙を呑んで一身一家の私情を忍ぶが天下の正理ぢや。茲を好く考へて、お前も憶病者になつてくれんか。

武兵　（うなづき）なりませう、相模屋武兵衞憶病者になりませう。

安房　なつてくれるか。

武兵　安房守樣でもおなりなさるぢやございませんか。（泣く）

安房　過分ぢや。

武兵　ヘイ——そして私が致しますのは？

安房　私はこれから薩摩の屋敷へ行つて、西鄕と談判するのぢや。若し其間に氣早の者共が輕はづみの事をし出しては、私の苦心も水の泡ぢや、旗下は今抑へてまゐつたが市中まではとても屆かん、依

てお前方を頼むのぢや、どうか仲間中へも觸れまはして、粗暴の振舞の無い樣に取りはからうてはくれまいか。

武兵　よろしうございます、此河岸は私が引受けました、塵一つ立たしやしません。

安房　若又示談が調はん時には、（聲を潜めて）此方から火をかけて敵の前後を燒くつもりぢや。

武兵　エ？（ト目を見張る）

安房　其時はさかさまに、出來る丈妨げてくれ。

武兵　呑込みました、イヤこいつは私も一世一代でございます。（ト痛快の顏）

安房　（笑を帶びて）憶病者か、つはものかな？

武兵　殿樣、（ト見上げる）

安房　賴んだぞ。（立上る）

武兵　大丈夫でございます。

（此體よろしく幕――宮さん〳〵の唄でつなぐ）

其二　高輪薩摩別邸

少し斜に高二重、上手に床、富士の畫をかけ、續いて襖。雲龍の畫襖、折りまはして椽、下手柴垣。兵士七八人椽にかげたり、うろ〳〵して居る。

一　いよ〳〵翌は總攻撃ぢや。

二　腕がぶる〴〵ふるふで無いか。

三　鳥羽伏見では食ひ足らん、大阪でと思うたら、大將から夜逃げぢや。

四　箱根で防ぐぢやらうと思うたら、見す〳〵無事に通したのは關東武士も腰が拔けたな。

五　もう玆まで乘込んだら、此方の手に落ちたも同然ぢやのう。

六　しかし横須賀にはフランスの軍艦が居るぞ。

七　なあに横濱にィギリスの軍艦が居る。

八　しかしあの公使のパアクスといふのは中々むづかしい男だといふから、餘り宛にならんぞ。

一　かまふものか、鳥羽の時でも味方は小勢だつたが、氣で勝つたぢやないか。

二　さうだ〳〵氣はもう江戸を呑んでゐる。

三　手出しをしたらぶち切つて、墨田川を埋めてやらう。

四　東叡山に積み足して死骸の富士を造つてやらうか。

五　口先ばかりで腸があるか無いか裂いて見やうよ。

（野津七左衞門、洋服、安房守を案内して下手椽へ出る、兵士立上つて見がまへする、七左衞門行けと仕方する、兵士溢々に下手へ入る。二人座敷へ通る）

七左　どうぞこれへ。

（安房守上坐につく、七左衞門入る）

（西郷吉之助上手の庭より洋服、引切下駄で出て、座敷へ上り下坐につく）

吉之　先立ては山岡さんを以てお手紙でござりまして確に拜見しました。

（七左衞門兵士二三人垣の陰より腕を扼して聞く）

安房　一寸申しました通り、昨年以來上下一致といふ事でしたが矢張私があつてな、今日の有樣になりましたて。つまり日本に人物が無いのでせう。鳥羽――伏見――ありやほんの小兒の戯で――（微笑する）

吉之　いや戯れに御旗は出しません。（嚴格に）

安房　イヤ一二の藩士の輕卒で、おはづかしい次第です、しかし堂々たる日本、二千五百年を見渡しても、いつも〳〵同士打ばかりで、五大洲に目を開くと、つまらぬ話ぢやありませんか。

吉之　その外國に比類の無いのは、萬世一系の大君があるといふ事、かりそめにも手出しをしてはの

う？

安房　それは誠に恐縮ぢや、さればこそ慶喜は幕下を捨てゝ此江戸へ歸りましたが、城へも入らず上野に蟄居して、恭順の意を表して居ります。こりや今に始まつた事ではないので、抑々大政を奉還してから、去年十二月の御改革ぢや、宮位領地まで返上せいとの御訓令であつたから、會津、桑名、旗下の憤激は中々抑へられん。此時微塵も野心があつたら、都の町に血を流して、それこそ貴君とけふの地を代へるかも知れぬ所、それを捨てゝ大阪へ退いたのが證據でせう。

吉之　ぢや此一月の上京はな？

安房　あれはあなたの藩士やら浪人やら、江戸市中を亂暴狼藉、取押へようとすると此屋敷へ逃込む、お渡しなされと云うてもお渡しなさらぬ、それに是非一いくさ、いや何でも幕府を討つといふ御内定を聞いたから――まだ制止する主人の命も聞かず出かけたので――

吉之　いや君側の奸を除くと始末書を出されたが――

安房　先か後か、兎に角野心があつたなら、大阪に立籠つて淀川口と西國街道を塞いだら何となさる。また駿河に退いて、清水港から海軍の力を合はすのも易い事、箱根の嶮もありながら、茲へお詫びに參るのが、何より證據ぢやありませんか。

吉之　しかし旗下は云ふに及ばず、町人まで屯をして殺氣があるは確ぢやが？

安房　それは手前百方鎭撫致して居るが、何をいふにも百六十萬人が三百年來の家も身も亡ぼすか殘すかといふ場合です、筒音一つ鳴るが最後、罪も報も無い町人は烟の中に包まれます。こりや德川の民ではない、日本の民ぢや。萬一事情が通ぜんばかりで、德川の爲に此民を御斟酌無いといふ事なら、是非に及ばん此方より火をかけて、民を殺して相果てる……主家を亡ぼすばかりか、民を殺し國を危うくする大罪……西鄕樣、お察し下さい。（暗涙を呑む）

吉之　（感動して）イヤ分りました、色々議論もございますが、此吉之助が一身にかけてお引受け申します。

安房　お引受け下さるか。（卜顏を見る）

（吉之助無言にうなづく）

安房　これを御覽下さい。（懷より一書を出して示す）

吉之　（開て見て）城明渡しの義は手續取計候上卽日田安へ御預相成候樣仕度候事

軍艦軍器之義は不殘取收置追て寬典の御處置被仰付候節相當之員數相殘し其餘は御引渡申上候樣仕度事

城內住居の家臣共城外へ引移愼居罷在候樣仕度事

鳥羽伏見の擧を助け候者共の義は格別の御憐憫を以て御寬典に被成下一命に拘候樣の儀は無之樣仕度候事

士民鎮定之儀は精々行届候樣可仕萬一暴舉致し候者有之手に餘り候はゞ其節改て御願可申候
慶喜隱居之上水戸表へ愼み罷在候樣仕度事――水戸表へ愼み罷在候樣仕度候事――フム――朝敵の名がござつてはのう？（ト首を傾ける）

安房　慶喜固より覺悟致して居ります、しかし我々臣下の情として、主人を他藩へ預けられ、其身の上に及ぶ事がありましては、其儘見て居られますか。此一事よりまた破れて、また國民の禍となる上に、外國につけ入られて、印度、支那の覆轍を踏みましても、最早手前共の力には及びません。唯唯死して後世の淸議を待つばかり、イヤ千秋の遺憾です。（ト俯むく）

吉之　フム――（ト考へて）イヤこれは一存ではお答へが出來ん、これから本陣へまゐつて、總督に言上した上、更に都へ奏問しませう。野津。

（七左衞門荒々しく出る）

七左　（言葉烈しく）參謀、だまされてはいけませんぞ。

吉之　（微笑して）何を云ふか、それよりは一同に明日の進擊は中止すると云へ。

七左　中止でござすか。（ト目を張る）

吉之　オヽ。

七左　でも……

吉之　小膽ぢやのう。

（七左衞門溢々入る）

吉之　（一轉して）勝さん、今度は一番困ッたらう。

安房　どうぢや、君と入れ代らうか。

吉之　ワハ、、、、、イヤ分らぬのは天運ぢや。月照上人と身投をした時、息吹返へさにやお目にもかゝらぬ。

安房　また上人は死に、有志家も殺されなけりや、櫻田の變も起るまい。

吉之　此方が殺され、其方が殺され、どゞのつまりが今日唯今ぢや。

安房　國を開いた將軍家は開いた爲に失ふとはなあ。

吉之　また夷狄を攘はふとした薩長が、夷狄より臺府を討つとは

安房　其發頭人は誰であらうな。（吉之助の顏を屹と見る）

吉之　（とぼけた顏で）イヤ天ぢや、命ぢや。（ト横を向く）

安房　誠に天命には向はれん、大勢には是非が無いて。（俯むく）

吉之　大勢には負けましたな。（ト氣の毒相にいふ）

安房　それに乘るとはお仕合せぢやな。（微笑する）

吉之　いや從ふのも負でない、天地の道は一でこあす。

（互に顔を見合はせて融和の思入――道具廻る）

其三、同門前

一面門。左右番所、長屋、目窓。兵士大勢内を覗いたり、うろ〳〵してゐる。

一　大分隙が入るな

二　何をぐづ〳〵云うて居るのか。

三　折角の總攻撃を見合せとは何の事ぢや。

四　あの勝といふ奴は長州征伐の時も一人で出かけて行つて、口の先で圓く納めたといふぢやないか。

五　でも歸るなり直剝けたから、けふでも何を云うても宛にならんぞ。

六　しかし今城には上に立つ奴は逃げて、彼奴一人でやつてゐるといふぢやぞ。

七　ぢや、奴をやつゝけたら、それ切ぢやな。

八　さうぢや、若い奴等は皆不服で、夜になると堀をほつたり、空威張りに力んでゐるといふ事ぢや。

九　ぢや、やつゝけようぢやないか。

十　やれ〳〵。

一　出て來たぞ。

（皆つめかける、安房守、吉之助袋つて門を出る。皆安房に詰寄る、吉之助睨む、皆並んで捧銃の禮を行ふ）

安房　皆さん、二三日の中には何とか決定しますから、御答禮をするか、其筒先にかゝつて死ぬか、どちらにしても、好く此胸を見覺えて居て下さい。

吉之　イヤ其胸は底の底まで私が刺して見せませう。

二人　ワハ、、、、、、、

（痛快に笑ふ——幕）

第四段

其一　上野山内

上手に大慈院の門、塀、下手木立の書割、前石燈籠。藤野、下手より出る――上手より僧二人出る。

藤野　もし一寸お尋ね申します、大慈院といふお寺はどれでございます。

一僧　大慈院はあれぢやが――何の御用ぢやな。

藤野　……あの……上様は如何でるらつしやいますか。

二僧　別にお變りはないが御心配のせいか、ひどくおやつれ遊ばして、おいたはしい事です。

藤野　誰もお側にお附き申さないのでございますか。

一僧　お側には二三人おつき申すばかりで御用は我々がつとめます。

藤野　それでは……お願ひ申したいんですが……一寸お目見得は出來ますまいか。

二僧　どうして〳〵、女は無論の事、男でも、士でも、誰であらうが、一切お目通りは出來ません。

藤野　誰でもでございますか。

一僧　出來るのは勝樣丈です。

藤野　それでは尙更お目見得が願ひたいんですが――

二僧　いけません〳〵（行きかける）

藤野　アもし、それでは此書面なとお取次を願ひます。

一僧　それもいけません、何であらうが、一切取次ぐ事はならんといふおつしやり付で。

藤野　それでも私の事ぢやございません、お家のお大事でございますから。

二僧　いけません〳〵（また行きかける）

藤野　そんな事をおつしやらずに……（ト突きつける）

二人　いゝえいけませんと云ふたら。（入る）

藤野　ア、どうしたら好からうねえ。

（講武所の若侍二三人ぶつさき羽織、義經袴で出る）

藤野　一寸伺ひます、あなた方は大慈院からお出ましなさいましたが、上樣にお附きの方でございますか。

一侍　いゝや上樣にお目見得を願ひにまゐつたのぢやが、かなひませんでした。

藤野　矢つ張りかなひませんか。

二侍　やかましく云つたんですが、どうしてもいけないので。

藤野　まあなぜでございませうねえ。

一侍　それはどこまでも恭順と御決心遊ばして居らつしやるから、我々が何と云つても耳にもお入れなさらないのだ。

藤野　でもそれでは尙更申上げなけりやなりませんが――

二侍　それは我々ばかりでなく、何人となく毎日々々お城へも出かけては、建白したり、議論をするのぢやが、肝心の上樣があれで、一切勝にお任せ、此方は高橋伊勢守が頑張つて居るから、仕方がありません。

藤野　本當に勝樣の氣が知れませんねえ。

一侍　なあに西鄕と云合はして居るに違ひないのだ、彼奴を打つて血祭にするのが一番だな。

二侍　實は手前此間薩摩の屋敷から歸る所を狙撃したのだが、打損つたて。

一侍　それは殘念だつたのう。（二人話しながら入る）

藤野　ア、せめて此書面なとお目にかけなけりやならないがねえ。

（八郎出る）

藤野　おゝ八郎樣！（うれしい思入で側へ寄る）

八郎　藤野さん、どうしてこんな所へ？

藤野　いよ〳〵城渡しといふ事でございますから、立つても居てもたまりません。それでは打死を致しました父ばかりか、多くの方々も犬死になります。それにこれから上樣始め旗下一同どうなりませう。これは是非お止め遊ばす樣にと、心一杯此書面に認めまして、お目にかけやうと持つて參りま

したが、誰も取次いでくれないのでございます。

八郎　それは好く思付きなすつた。私も是非共お目通りをして御諫言をしやうと參つたのだが、取次いでくれませんか。

藤野　勝樣の外はお目通りは出來ん相でございます。

八郎　イヤ出來んでもする、無理にでも通つて申上げる、

藤野　エ？

八郎　非常の場合ぢや、無禮の段は御免を蒙つて、是非共申上げる。（行きかける）

藤野　アもし、それでもお聞入がなかつたら、どう遊ばします。

八郎　お聞入があるまで申上げるので。

藤野　どうしても無かつたらどう遊ばす。

八郎　其時は是非がない同志の者を集めて脫走するんです。

藤野　エ？

八郎　どこぞへ立籠つて我々の志は立て通します。

藤野　……御尤でございます……それではこれで……いよ〳〵お別になりますねえ。（戀しげに見る）

八郎　……（無言に見かはす）

藤野　……隨分お大事に……（ト聲立ず泣く）

八郎　私よりあなたこそ大事にして、お父様やら……私もどこぞで死んだとお聞きなすつたら好く弔うて下さい。どうせ墓もない體だ。せめてあなたに思出して貰ふのが、唯一の頼みだ……

藤野　（涙を拭うて）いゝえ私は……親に別れ、あなたに別れ……お城は人のものになり、江戸は田舎者に踏みにじられ。私共までどんな耻辱を受けるかも知れません……

八郎　だから是非共お止め申すので、お聞入が無くつてもやる丈やりますから、まあそれを頼りにしてお出でなさい。（ト立上る）

藤野　いゝえ、私も心丈の事を致します、あなたお願ひ申しましたよ。

八郎　エ何を？（ト振りかへる）

藤野　どうか跡で……

八郎　何をなさるな？

藤野　（書面をつきつけ）これを上様に……命を添へて申上ると云つて下さい……（自殺する）

八郎　（驚き悲みながら受取つて）藤野さん（抱上て）確に申上げますから、此身に添うてお出でなさい！

藤野　ハイ……（嬉し相に取付く——道具まはる）

其二　大慈院

二重、障子立切り、折りまはして椽、下手廊下、前庭、植込、石燈籠、手水鉢等、總てわびしい體。僧庭を掃いてゐる鳩の聲。

僧　（耳を立てゝ）ヤア、何ぢや、あの音は、――また侍衆がやつて來たのか――それとも先の娘かな――ヤ、亂暴をし出したな――オ、茲へ――

（八郎僧の止めるを振拂ひながら出る）

二僧　これ理不盡な事をなさるな。

八郎　でもお止めなさるぢやないか。

二僧　それは誰も通すなといふ仰せ付で――

八郎　假令何と仰せあつても、容易ならん御家の大事だ、是非共お目にかゝるので――（尙も寄る）

一僧　これお待ちなさい。

（止る、八郎振拂つて椽へ上り、障子を開く、屏風立てゝある）

八郎　これは（跡へ寄り）イヤまだお目が醒めませぬか、（椽へ坐つて手をつかへ）上様――上様――お目をお醒まし遊ばしませ。（答無し）エイまだお目が醒めませぬか。今暫お休み遊ばすと、お城は敵に渡りますぞ。明渡しが迫つて居ります、お目がさめずば醒まさせませうか。（屏風に立ちよる）

一僧　これ無禮な事をなさるな。

八郎　ア云甲斐ない上様――抑々二百年の太平はいふに及ばず、黒船の渡來以來も内外の事情を斟酌して、無謀の戰をお避けなされたのは、御國の爲にも大功でございます。殊に御先祖傳來の大政奉還遊ばしたのは比類無い御忠節でございまするのに、奸物共のはからひで遂に戰となりましたが、唯一戰に敗れたとて、それ切に手を束ね、お城まで明渡しとは何事でございます。三河武士はまだ腐りは致しません、海軍は此方ばかりで、更に一戰致しましたら、まだ〳〵望はございます、早くお立ち遊ばしませ。（答無し）エイお立ち遊ばしませぬか、まだお目がさめませぬか、東照公以來片足も敵に踏ました事もないお城を上の御代になつてお渡し遊ばしますか、代々の御靈に何と申譯を遊ばします。（答無し）加程申してもお聞入はございませんか、これは鳥羽で討死致しました佐久間近江守の娘藤野が血汐で書いた建白でございます。（突出して）今御門前で自害致しました、命を籠めた此一書お取上げ下さりませんか――

二僧　何と云はれてもお聞入はございますまい。

八郎　あ是非がないなあ――しかし上様はお立ち遊ばさいでも、我々は決して倒れん、どこでなりと死ぬまでやるのだ。

（憤然入る、僧附いて入る。安房守上手の庭へ出て跡を見送り椽へ上る）

安房　上様、安房でござります。

（屏風を開く、上手に床、先祖代々の位牌を並べ、經机に香を焚き、慶喜看經の體、安房守見て、先づ無言に泣く）

慶喜　（振返つて氣づかはしげに）どうぢや、あなたの返答は？

安房　御安心遊ばしませ、西鄕吉之助一身に引受けくれましてござります。

慶喜　それでは此方の本意も貫徹したな。

安房　御恭順の趣篤と申開いてまゐりました。

慶喜　そして官軍は？

安房　即坐に命令を下しまして、總攻擊の義は差止めましてござります。

慶喜　さうか。（息をつく）

安房　これで先づ此江戸市中も兵火の禍を免れました。

慶喜　そればかりか皇國の分裂を防ぎ、外國に乘ぜられる憂もあるまい。

安房　また上のお身も臣下一同の死を以て懇願致しました。

慶喜　イヤ朝廷に對し、當家に對し、申譯に自分一人、どの樣な刑を受けても好い。――思ひまはせばまはす程不思議なは吾運命ぢや。云ふまでもなく東照公が水戸をお立てなされたのは、宗家を補佐の御本意ぢやに、既に義公の時、大日本史を編纂なされ、或は楠木の墓を湊川に立てられたが、測らずも今日の前兆と相成つた。父烈公に至つては激しく攘夷の說を主張なされ、時の大老井伊と爭ひ、予も其爲に登城を止められ、謹愼を命ぜられたが、其掃部は藩士に殺され、我等は後免されて補佐となり、長州が蛤門に迫つた時は薩州と共に打ち退けたが、御先代の早世に御代を繼ぐと長州は薩州と祕密の盟約、御所に取入りいくさの用意、それより早く土州の意見に大政奉還しようとは御先祖は固より、義公、烈公さへよも其子孫の上に左樣な役目が當らうとは、夢にも思召されまい……しかも城まで明渡……明渡さねばならぬとは……當家の運か、吾運か、不思議に過ぎて恐ろしいわい……

安房　御尤もでござります、しかし上樣ばかりではござりません、此安房も小身からかく御登用下さりましたが、それも權威を渡す役目。御運はまた手前の運か、手前の意見御採用下さる丈、御運も亦此身に引受け、思ひまはせば二重三重、不思議にもあり、また當然、恐ろしくもあり（氣を變へて）お喜び申上げます。

慶喜　何喜ぶとは？（ト不審の體）

安房　お代々の中でもお幾人？　東照公の御本意を心からお繼ぎ遊ばしましたか。三百年の鎖國の太平、上も下も榮華の夢、大御所に極まりましたが、夢をお繼ぎ遊ばすより、覺めてお渡し遊ばすが御就職の甲斐がございませう。

慶喜　何の甲斐があるものか。これを見い。（短冊を示す）

安房　（受けて見）花もまたあはれとおもへ大方の春を春とも知らぬ吾身を。

慶喜　死ぬより苦しい事があるのう。

安房　ハッ。（俯むく）

慶喜　そして城地は？

安房　明日勅使御入來になりまして、明渡しの手續を、致す筈でございます。

慶喜　アこれ〳〵そりや何を申す。今も今とて若者等はまだ心服致し居らぬぞ。それに輕々しく迎へては、どの樣な變事を起すも知れん。何故十分用意をせんぞ。そりや餘り大膽ぢや。萬一の事があつては吾志は泡になる。それを思うて一月以來一日も安眠せず、代々の御靈に向うて居る心の中、其方まで分らぬか。（泣く）

安房　ハッ。（手をつく――暫くして顏を上げ）いやそりやお言葉が違ひませう。抑々御決心遊ばす時、大事

に當る人も無く、手前は固より御辭退致しましたが、お許しない故お受け致しました、唯今と相成つて申上げるは、御心中御推察致すからで、お志を泡にする安房守ではございません。萬一の事がございましたら、再びお目にかゝりません。

慶喜　エィ其方に凶事があつては何者が取りはからふ。吾本意を知つて居るのは其方ばかり、其方を知つて居るのも自分ばかりぢや。

安房　（感涙に咽んで）かたじけないお言葉、何しに輕々しうはからひませう。御安心遊ばしませ。

慶喜　いや安心は出來ん、危い上にも危いわい。

安房　（聲を勵まし）エィお氣の弱い、天下の大勢は定まつて居ります。

慶喜　それも小事より亂れるぞ。

安房　亂れてもまた治まり、一に歸するが道でござる。

慶喜　若し吾手より亂れては、後世までも濟まんでないか。

安房　それは手前が血汐を以て急度洗うてお目にかけう。

慶喜　エィまた氣づかひな事申すか。

安房　（たまり兼て）御免。（行きかける）

慶喜　（立上つて）アこれ城明渡しは？

安房　枕を高くお休み遊ばせ。

（急ぎ足で入る――慶喜つか〳〵と進んで其跡を見送り、向をずつと見渡して憂に堪えぬ思入で幕）

第五段

其一　城内大奥

正面大床、黑塗の框、檜糸柾の柱、金砂子金泥雲形の貼付、大幅をかけ、前に造物の萬年青、横蓮棚、梨子地の硯筥を置く。左右金泥二葉葵の模様の襖。

十三代將軍後室、天璋院、三十一、切髪、被布、白の三重で上段に、年寄長束、中年寄花町、小姓二人、局達大勢はなやかな打掛、總模様の着付で下に控へてゐる。

遠くで唄

好きも惡しきも三月切よ
末はお江戸も何となる。

長　束　ありや五代將軍樣の御代にはやつた唄でございます。どうして今頃誰が歌ふのでございませう。

花　町　こりや例の紅葉山の狐狸の業でございます。

局　一　折も折、時も時、好きも惡しきも三月切とは！

局　二　末はお江戸も何となるとは？

局　三　ほんに何となるのでございませう。

局　四　お江戸より此お城明渡しの時刻が迫つてまゐりました。

局　五　私共も何となるのでございませう。

花　町　何となるやら分りません、が先づ立退の支度をせねばなりません。

局　六　では愈々お立退き遊ばしますか。

花　町　立退かねばならぬではございませんか。

長　束　いえ、ならぬ事はございません。どうあつても立退かぬとおつしやつたら、致方が無いではございませんか。

局　七　でも上樣でさへ御恭順の上——

局　八　もうお勅使が見えて居ります。

長　束　何が見えても此儘でお動き遊ばしてはなりません。

（天璋院苦悶の思入――御錠口番出る）

錠口番　申上げます、岩佐攝津守殿お目見得を願はれます。

天璋　これへ。

錠口番　ハア。（入る）

長束　屹度お立退きの催促でございます。お逢ひなさらぬ方がよろしうございますのに？

花町　いえ、お表の様子をお聞き遊ばしたらよろしうございます。

（御錠口番先に岩佐攝津守、五十代、社下で出る。御錠口番入る）

攝津　申上げます、唯今お勅使が見えました。

天璋　それは誰々ぢや。

攝津　柳原侍從様、西郷吉之助殿でござります。

天璋　エ、西郷？

長束　西郷様は薩摩からお輿入の節、お係として附いてお出で遊ばしたではございませんか。

花町　其お方が今日は城受取のお役としてお出でなさるとは！

長束　こりや西郷様をお呼び遊ばして、思召の程を直々お申聞け遊ばすが何よりでございます。

攝津　左様な事も出來ませぬな。

長束　何出來ぬ事がございませう、以前は御下來ではございませんか。

攝津　それは十年も昔の事。

花町　では安房守樣をお召し遊ばしたら如何でございませう。

長束　あの人が何になります、顏を見るのも腹が立ちます。

天璋　いや安房に一言いひたい事がある、これへと申せ。

攝津　安房守殿は今日御出仕になつて居りません。

花町　ではどなたがお勅使をお受け遊ばす？

攝津　田安樣に大久保樣でございます。

長束　肝心の日に顏出しもなさらぬとは？

花町　何か事でもあるのではございますまいか。

攝津　ハイ、今日は軍隊を引連れぬといふ約束でございましたのに、矢張連れて來られました故、血氣の者共が駈付けまして、既に事に及ばうと致しましたが、それは萬一お勅使に對して無禮があつては、それから破れの元とならうと、西鄕殿の注意で、其代り途中ばかり、お城の土は踏まさぬとの事で治まりました。安房守殿も彼方此方と駈けまはつて居られます、依つて手前より申上げます、何とぞ一橋御殿へお立退き遊ばします樣お願ひ申上げます。

天璋　其方は何ぢや、上樣のお使か。

攝津　ハッ……

天璋　よもやまだ上樣へ申上げる間もあるまい、勅諚の趣逐一承はるまでもなく、唯立退けとは誰に云ふのぢや。

攝津　ハッ……

天璋　妾は十三代、靜寛院殿は十四代將軍家の御臺所、御代こそは短かくとも、此お城は命かぎり離れまいと思うてゐたに、當上樣は御引移り、其御先途も見屆けず、仰せも聞かずにうかゝと立退かれうか。もしもお身にかゝはる事があつたら何とする。

攝津　ハッ……

天璋　妾茲に居るからは、上樣よりの仰せで無くば、立退く事は相成りませぬ。

攝津　……それでは誠に……當惑仕りますが……

天璋　其方共は何であらうが立退くのか。

攝津　ハッ……

天璋　云甲斐無い者共、明渡すまでも無く、早空城となつたのか。

攝津　……ハッ……

天　璋　侍は居らずとも妾等が居る。まだ鳥の巣にはなつて居らぬぞ！

攝　津　ハア……恐入りましてござります……（困却の體で入る）

長　束　好うおつしやりましたなあ。

局　一　少し胸が透きました。

局　二　しかしまた何と申してまゐりませうやら？

（御錠口番出る）

錠口番　申上げます、西郷參謀樣がお目見得をお願ひ遊ばします。

長　束　エ、西郷樣が？

花　町　まあ、どうして向から？

天　璋　これへ。

錠口番　ハア。

（入る）

長　束　彼方から來られるとは何よりぢや、存分おつしやるがよろしうございます。

花　町　いえ、昔は御下來でも今日はお勅使、無禮がましい事があつてはなりますまい。

長　束　何かまひますものか、矢張御下來としておあしらひなさるがよろしうございます。こゝは大奥、

花町　表向の席でも無く、彼方からお目見得を願はれた上からは、御上使ではございません。
長束　でも官軍の參謀にはちがひございません。
天璋　其參謀が尙憎らしいのでございます。せめてこれで恨の端を！（ト懷劍に手をかける）
二人　これ、靜に！（ト立つて上段を下る）
　　ハア。

御錠口番案内、吉之助洋服、肩に錦切をつけて出る。御錠口番入る　長束つか〳〵と側へ寄る、花町制して入代り、上手へ指す。局一同目を張つて見る、吉之助立止る。

天璋　あれへ。
吉之　ハ。（ト下手へ坐る）
天璋　ずつとあれへ。
吉之　いや、これでよろしうござります。
天璋　いえ、今日は勅使としてお出でとやら、どうぞあれへ。
吉之　いえ、此方へは昔の儘の吉之助でお目見得を願ひます。
天璋　何昔の儘？（ト不審の體）
吉之　姫君。

天　璋　エ？

吉　之　あなたこそ元のお席へ、さ、さ、そこでは御挨拶が出來ません。

（天璋院うなづいて上段へ戻る）

吉　之　（平伏して）其後は久しくお目見得仕りません――（ト天璋院の顏を見て）あ、お變りなされましたなあ。

天　璋　あなたもお變りなされたなあ。（ト其姿を見る）

吉　之　手前はいつも同じ事でござります、それよりはあなた樣、（ト氣の毒の體、また氣を變へ）いや先づ御壯健で何よりでござります。

天　璋　これで壯健と見えますか。

吉　之　エ……

天　璋　床につくより苦しい胸推量は出來ませんか。

吉　之　ハ……（ト俯むく）

天　璋　先づ何よりも聞きたいは、上樣のお身はどうおなり遊ばしました。

吉　之　ハイ、京を立ちますまでは、是非切腹――

一　同　エヽ!!!（ト顏を見合はせる）

吉之　――との事でござりましたが、勝さんから色々と承はりまして、また彼方へ取つて返し、御先祖以來の功業やら、御尊父水戸中納言樣の勤王やら、其外何かと御取りなし致しまして、死一等をお宥しになり、水戸表へお立退きの上御謹愼といふ事になりました。

天璋　水戸表へ？　それで先づ安心致しました。そしてお城は？

吉之　尾張藩へといふ事でござりましたが、お願に依つて田安殿へお預けとなりました。

天璋　そして鳥羽伏見の戰に出た者共はどうなります。

吉之　それも死一等を宥されました。

天璋　それから城内に居る者共は？

吉之　それは城外へ引退き、謹愼する樣との事でござります。

天璋　それでやう〳〵落付きました。

長束　いぇ〳〵まだ安心は出來ません、私共はどうなるのでございます、どこの田舍に落ちぶれて、どんな憂目にあふ事やら知れません――

吉之　いや、お立退きなされたからといふて、憂目におあひなさる樣な事がござりませうか。此お城も結構ぢやが（と見まはして）世界は更に廣うござりますぞ。お庭の花見菊見より、五大洲もお心任せにお月見をなされた方がお氣樂ぢやござりませんか。

天璋　それでは妾も里へなどゝは云はれますまいのう。

吉之　エ、お里へ？

天璋　上樣お歸りの時からそんな話がありましたが、それならば一足もこゝを出ません、達てといはれるなら覺悟がある。（卜屹といふ）

吉之　ハ、、誰が左樣な事を申しませう。確に十三代將軍家の御臺所、今更何と致しませう。お輿入の節には私もお附き申しました。

天璋　それを忘れはなさらぬな。

吉之　何忘れませう、先殿と時の閣老阿部伊勢守殿が苦心して、天下の爲に取りきめられた御緣談——

天璋　しかも上樣は御病身……「御臺所になつたとて、心づかひばかりで可愛想なが、國の爲と心えてくれ」と、父上が涙を流して……

吉之　……手前も其時はそれで幕府と藩との間も親しくならうと、大慶に存じまして、お道具萬端自分で吟味を致し、思切り張込みました。

天璋　ほんに衣裳も京染が美しう出來ましたな、手道具はまだこゝに——

（卜局に指圖して棚から取出させる）

吉之　御意に入つたと御褒美に光琳蒔繪の硯筥を戴きました——古今集——千載集——お手筥に香道具

（ト局が出す品々を一々取って見て）皆見覺えがございます。（ト昔をしのぶ思入）

天璋　其喜も一年足らず、次の年伊勢守は亡くなり、其次の年は上樣も……（ト泣く）

吉之　先殿も同じ月に！　私も其秋入水！

大璋　不思議な程續く不幸此上もあるまいと思うたはほんの糸口、それからの亂れ樣！　櫻田の騷ぎに
は國の者も交つてゐたとやら、生麥では三郎殿の供先をイギリス人が駈拔けたのを切捨てゝまた騷
動、鹿兒島では一いくさ、長州御征伐以來は愈々國との間も明き、去年の暮は江戸市中を國の者が
亂暴狼藉、こゝまでも聞こえる毎に、つらいやら、氣づかひやら、針の蓆に坐る心地。とう〳〵鳥
羽の相手も薩摩！　けふの勅使も西鄕殿！（ト恨めしげに見る）

（長束懷劍を拔いて吉之助にかゝる）

吉之　（其手をおさへて）いや、お國の兵と思召しては違ひます。手前も一藩、一身の爲にした事ではござり
ません、何事も天下の爲（ト劍を取上て花町に渡し）いや世の中といふものは小さな人間の思ふ樣にな
るものぢやござりません。（ト長束を放して）現にあなた樣のお興入も今の上樣をお跡續にお勸めな
さるお積りぢやつたが、さうはゆかず紀州から御養子、かと思ふと其跡へお直り、其慶喜樣の代に
此始末！　それも德川家ばかりぢやござりません、賴朝以來五百年の始末をつける事になるので、
鎌倉、室町、江戸の總勘定、（ト皆を見まはして）總て大きな目で御覽なされ。手前も城渡しが濟みま

したら、江戸市中の鎭撫は勝さんに任しまして、肩の荷を下した上、國の山の中へでも引込む積りで――

天　璋　エヽ、江戸は安房守に任して、國へお引込み？

吉　之　人間より猿や猪を打つ方が餘程氣樂でごわすからなあ。ワハ、、、、、、、。

天　璋　それで好く分りました。實はあなたの心持も疑うて居りましたが、天下の爲のおはからひ、五百年の引渡し、功成つて、お引込みとは、此心の苦しさもそれでいさゝか慰めませう。

吉　之　もうさつぱりとなされませ。今日も城渡より、御維新の御祝儀を申上げにまゐつたので、日本晴とは此事でごわすなあ。

天　璋　何、維新の御祝儀？（トまだ泣えぬのを勉めて）それでは床も松竹梅に！

花　町　ハア……そしてお立退き遊ばしますか。

天　璋　おゝ跡見苦しう無い樣に、此品々も此儘に！

局　ハア。（ト元の棚へ戻す）

長　束　いえ、どうあつてもお立退き遊ばしてはなりません、御先祖代々のお住居でございます、私共も何十年か、起き臥しゝた大奥でございます。間毎々々のお床から、お襖からお疊までなつかしいではございませんか、それにもう見る事も出來ぬとは私にはたまりません。皆樣が、お立退き遊ばして

も、私は退きません。お柱を抱占めても、私は離れませんし、此命を取られましても、私は退きません――（ト興奮して襖、柱を撫でまはり、上手へ走つて入る、皆悲痛の思入で見る）

天　璋　（哀の思入で）用意を。

一　同　ハア。

天　璋　（吉之助に）ではまた逢ふ事もございませう。今度こそは唯の賤の女――

吉　之　いえ私にはいつまでも姫君、いかに御維新でも昔を忘れる吉之助ではございません。

天　璋　（立つて段を下り）好う云うて下された、あなたこそ尙天下の爲に、（ト側へ近づき）お大事になさるが好い。

吉　之　（拜伏して）難有う存じます。

天璋院今更名殘惜い思入で、ずつと見かへる――花町始め局皆泣く――吉之助顏を上げて痛ましい思入――天璋院よろ〳〵と上手へ二足三足、倒れかける。花町支へる。局達側へ寄る。天璋院拂うて下手へ向ふ――暗轉――

其二　城外堀端

正面二重橋、左右城廓、堀、柳數株。旗下の侍七八人、興奮した體で上手から出る。

侍一　もう少しで破れる所を、惜しい事をしたなあ。

侍二　勅使ばかり入城との約束を破つて、矢張軍隊をつれて來たから、そりやこそと駈けつけたのにねえ——

侍三　それも殺氣が見えたから、なんて、西郷め、癪な奴だ。

侍四　とう〳〵見す〳〵明渡か！

侍五　いやまだ軍艦や、鐵砲を渡すのが延びたから、それまでにどうかなるよ。

侍六　でも本丸を渡してしまつてはなあ——

侍七　いや江戸は廣いぞ、それにこれから東はまだ此方の物だ。

侍八　さうだ〳〵江戸でいけなかつたら脫走するんだ。

侍一　さうだ、脫走々々！

（がや〳〵云ひながら入る——おりき、進吉下手から出る）

進吉　もう濟んだ時分ですね。

りき　さうだねえ、どうか無事に濟めば好いが？

進吉　今行つた手合は何だか物騷な體でしたね。

りき　ひよつと何事か起つたら、上樣や勝樣の御苦勞も無になる、あゝ向から來るお駕はどなただらうねぇ――

後へ寄つて土下坐する。駕、質素な供廻、花町始め局達微裝して附いて上手から出る――駕の中から手鳴る體止る、向側の戸を明る。花町等城を見返る――戸を閉る、駕を上げて、下手へ入る。

りき　（見送つて）ありや天璋院樣だよ。今までに引きかへて、あの姿はねぇ――

進吉　何とも云樣がございません。

りき　どこへお立退きなさるんだらう。

進吉　見屆け樣ぢやございませんか。

りき　さうだ、せめてそこいらまでお附き申して行かうよ。（ト二人下手へ入る）

（安房守、上手から、しほ〳〵出る、武兵衛下手からつか〳〵と出て其前に跪づく。）

武兵　殿樣……

（安房守無言に退けと促がす、武兵衛立たず、落涙の體――鐘の音）

武兵　（上手を見まはして）今頃は將軍樣は――どんなお心持でございませうねぇ――

安房　（上手を見返つて）其將軍も夢になつた――黑船の渡來此方、十五年の波風も――敵も、味方も、夢になり、一人、一人の働から、互に流した血汐も、涙も――

武兵　それも夢でございますか。

安房　いや、それは皆露になり、根元に泌んで、花になり、日景に匂ふ御國の維新――目出たいのう。

（ト悲を含んでいふ）

武兵　（涙聲で）……へイ……お目出たうございます……（ト俯むく）

安房　（向を見渡して）江戸はこれで誠の太平、鎖國の中の繁昌より、世界に開く大都會、墨田の水はアメリカから、イギリスまでも自由自在ぢや。（ト稍快活にいふ）

武兵　でもお城は何となりませうな。

安房　（城を見上げて沈痛な表情で）城も草になるものか。三百年は空で無い。夢は覺めても力は殘る――あ世の中は誠ばかりぢや。

（下手へ行さかける――鐘の音、夕日城にさす――武兵衛尉悲痛な思入――此體よろしく

――幕――

大正十四年二月一日印刷
大正十四年二月五日發行
大正十五年八月一日再版印刷
大正十五年八月五日再版發行

現代戲曲全集
第三卷

著者　松居松翁　高安月郊　山崎紫紅　伊原青々園　岡鬼太郎

發行者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　中塚榮次郎

印刷者　東京市下谷區二長町一番地　守岡功

印刷所　東京市下谷區二長町一番地　凸版印刷株式會社

發行所　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座七八三番二一八八番
振替東京五二二九八番

（非賣品）